

フアリード・ウッディーン・ムハンマド・アッタル著
藤井守男訳『イスラーム神秘主義聖者列伝』国書刊行会

本書は、ペルシアの著名な詩人、アッタルが、初期のイスラーム神秘主義者（スーフィー）の言行を、逸話、奇蹟譚を取り混ぜて、まとめ上げたものである。ペルシア文学のなかで日本人に最も読まれている作品はオマル・ハイヤームの四行詩集『ルバイヤート』であろうが、訳者の解説によれば、その四行詩の多くがアッタルの作品である可能性もあるそうである。あの厭世的で享楽主義的ともとれる『ルバイヤート』と、この『イスラーム神秘主義聖者列伝』を対比しながら読んでみるのも興味深い作業である。

本書には全部で十四人のスーフィーの言行録が収められている。いずれのスーフィーも俗世に背を向け、自我を迷妄として捉え、唯一神アッラーへのすさまじいまでの愛に生きた姿が描かれている。また彼らの為した奇蹟も、言行録に興味深さを加えるものとなっている。これらのスーフィーは、イスラーム哲学史の概説書でも言及されているが、哲学史の厳密な記述によつてはうかがい知ることのできないリアルな肉体性を持ったスーフィー像が本書では描出されているのである。

イスラーム神秘主義はアラビア、ペルシアにとどまらず、インド亜大陸にも大きな足跡を残した。まず、インドにおけるイスラーム教の普及にはスーフィーとインド民衆の接触が重要な契機であったとされている。また、そこから惹起されたと考えられる聖者崇拜は、今日の南アジアのムスリム民間信仰の大きな柱と

なっている。民衆に現地語で説教したであろうスーフィーは、ウルドゥー語の成立・発展にも寄与したと言われている。これらのことから推察されるように、インド・イスラームの問題を考える場合にも、イスラーム神秘主義は大きな課題となるのである。

たとえば、古典ウルドゥー文学はペルシア文学の圧倒的な影響力の下に成立した経緯をもっている。私がパーキスターンに留学していたとき、ウルドゥー最大の詩人といわれるミルザー・ガリブの定型恋愛抒情詩ガザルの解釈の講義を受けた時のことである。今は故人となられたその先生は、ガリブのガザルをイスラーム神秘主義的に解釈されるのを好まれていた。ガリブのガザルに陶醉し、その解釈を朗々と説明されるその先生の姿が、今でも目に浮かぶことがある。このガリブでさえその詩想の多くをペルシア文学に依存していたのだった。訳者の解説にもあるように、ペルシア詩はイスラーム神秘主義に大きな影響を受けて発達した。そのペルシア詩に多くを負っているウルドゥー詩もまたスーフィズムなしには語り得ないのである。

ウルドゥー現代文学の重鎮的存在であるインティザール・フザインの小説に種々のスーフィー言行録からの引用で構成された作品があるが、このことから、こうした言行録は現代においても作家の想像力を刺激する力を十分に持っていると言えるのではないだろうか。

今日、イスラーム世界は、西欧との対峙で独特の動きを見せている。そのイスラーム世界の、知の体系の重要な構成要素であるイスラーム神秘主義の精髓を、一種の文学作品として読み、味わうことを可能にした本訳書の持つ意義は大きいと思われる。